特集・多様化する教育環境と社会❻

◎座談会・教育が変わり、社会が変わる

■丹羽健夫・浅井経子・浜野克彦・岡本勝利・南　学

1―教育が社会に影響を与えることも考慮を
2―子どもたちの変化～情報に敏感、体験的、実益志向
3―企業からみた最近の若者気質～マニュアル志向、応用力不足
4―企業が求める能力は構成力
5―生徒の二タイプ～理解型と納得型
6―横浜市の教育相談事例からうかがえる問題点
7―将来のために是正し対応すべきこと
8―社会に対する子どもの不満～変化に対応した仕組みが作れていない
9―今後の教育のあり方

南　今回、調査季報の特集テーマを「多様化する教育環境と社会」といたしましたのは、昨今の教育に関する様々な問題や現象は、教育それ自体の問題を持つとともに、社会の動きや社会現象に大きく影響されるとの認識に立ち、これらを同時にとらえていこうという狙いがございます。したがいまして、本日、お集まりいただきました皆さま方には、社会が教育に与えている影響や、今の教育問題が企業、行政、市民など、いわゆる社会に対してどんな意味があるかなど、社会と教育、相互の関係について、それぞれ専門のお立場からお話いただき、原因追求・課題解決というよりも、提言的な形でまとめさせていただければと考えております。

まず、昨年度まで「ゆめはま教育プラン懇談会」の委員、そして現在も、「二十一世紀の子どもと教育を考える懇談会」の委員をお務めいただいております浅井先生に、社会によって教育がどう影響を受けているか、今の子ども、特に青少年の置かれた現状をどう見たらよいか、あるいは、先生が実際に大学で学生と接する中で、青少年がどのように物を考え、行動しているのか、それは教育的に見てどうなのかというようなことについて簡単に問題提起していただければと思います。

1　教育が社会に影響を与えることも考慮を

浅井　やはり、社会が変化していますから、子どもたちが抱える問題も変化してきていると思います。ただ、社会の変化によって教育や子どもたちが変わるというだけでなく、何十年後にその子どもたちが大人になって社会をつくるわけですから、やはりそこも見据えていかなければならないと思います。現在の社会の変化が教育の問題を引き起こしているというだけでなく、将来の社会がどのような社会なのかということも考えていかなければならないということをまず最初に申し上げておきたいと思います。

2　子どもたちの変化～情報に敏感、体験的、実益志向

浅井　社会の変化を受けた子どもたちの変化として三点挙げたいと思います。まず、情報に非常に関心が高いということです。情報機器はもちろん簡単に使えますし、情報に敏感で、情報を収集すること、使うことは非常にうまい。これはおそらく将来の社会を構成していく重要な要因になっていくと思います。しかし、その情報は体系的でなく断片的です。今後は、細分化された情報を組み合わせ、論理的・分析的に構築していく力をどう養うのかが問われると思います。自分で課題を見つけ、自ら学び自ら考える「生きる力」を育成するという今の教育改革の方向は、そのような力を養っていくためにはとても良いと思っています。

二番目は、情報機器とか情報に関心がある一方で、体験派というか、体験学習派になっていることです。今の若い人たちは、座学みたいなものは苦手です。座っていることには

■浅井経子（あさい　きょうこ）
淑徳短期大学教授
日本生涯教育学会評議員、横浜市生涯学習推進会議委員。専門は生涯学習学。
著書に「生涯学習を始めよう」、「生涯学習概論」ほか

もう飽きているのではないでしょうか。実習、インターンシップやアルバイトなど自分の体を動かして学ぶことには非常に強い関心を持っています。体を動かして、経験の中から何かを身につけていく、そういう時代になってきているのではないかという気がいたします。

三番目は、たいへん実益志向になっていることです。目先の役立つことを求める若い人たちが増えています。これだけ経済的に豊かになったにもかかわらず、考え方は非常に功利的です。端的な例で言いますと、教養関係の科目はほとんど好まれず、資格取得に直結するようなものに人気があるのです。ですから、教養を身につけるための指導が非常に難しくなってきています。「これはあなた方の将来の自分を形成する上で大事だから」ということでは飛びついてきませんので、彼らが興味を引く講義をする中で、教養的な事柄やものの考え方を身につけてもらえるように工夫せざるを得ません

これ以外にも、今、表出している問題には難しい問題がたくさんあると思います。しかし、問題と言われるものには、大人が自分の子どもの時と比べて、何か都合が悪いとか変化してしまっているものを問題だと言っているようなところもありますので、時代や社会の変化を見きわめる必要があると思います。

3 企業からみた最近の若者気質～マニュアル志向、応用力不足

南 企業の側からみて、採用時の学生あるいは入社後間もない人に、どんな変化を感じていらっしゃいますか。

浜野 一つは、マニュアル志向の学生が非常に増えてきたということです。面接での「あなたの人物評をわかりやすく紹介してください」という設問に対して、学校や出身地など全く接点の無い二人の女子学生から、「母のような存在」というフレーズから、その根拠となるエピソードまで、全く同じ受け答えをされたことがあります。想定問答を作るのは良いとしても、なぜ、そこまで丸暗記してしまうのか、当方で大変驚いた実例です。

もう一つは、応用力が不足しているのではないかということです。例えば、一対二という関係があった場合、仕事が四になった時に、過去の経験などから類推して八という回答を期待することが難しいのです。八という具体的な数字を示してあげないとそこまで行き着かないということが多々あります。優秀であるか否かの問題とは別に、そういった応用力が身につく場面、あるいは経験が彼らには無かったのではないかと思います。先ほど浅井先生がおっしゃった、情報収集とその使い方は非常にうまいが、必要でない情報は最初から入れないと言うか、すそ野の分野が非常に狭い、無用の用ということを知らない世代と言いましょうか、そういうことになってきていると思います。

4 企業が求める能力は構成力

南 そのような若い人に対して、企業としてはどんな能力を求め、また、実際に採用していらっしゃるのですか。

浜野 企業の採用基準と言ってよろしいかと思いますが、これは各社各様でそれぞれ求めるものが違ってくると思います。一般的によく言われた独創性や協調性はあまり言われなくなりました。体育会系というのも、体力勝負の営業戦力が求められていたバブルの頃までで、今は影を潜めています。最近、各企業が求めているのは、発想豊かな人やよくまとめる力のある人などにシフトしてきていると思います。当社の場合ですが、今年度の採用状況を例に申し上げますと、最終内定者は五十人、倍率は約八十八倍でしたので、優秀な方もたいへん多く、先ほど資格の話も出ましたが、資格を幾つも持っている方、TOEICが九五〇点とか、何カ国語ができるとか、そういった方も応募されました。しかし、実際、どこに重点を置いて面接のスクリーニングをかけるかというと、資格そのものよりも、やはり、入社後、一つ一つの仕事を最初から最後まで自分の力でうまくまとめ上げていく力があるかどうか、つまり、構成力があるかというところです。

5 生徒の二タイプ～理解型と納得型

南 河合塾の丹羽先生には、以前、別の機会に、生徒のタイプには理解型と納得型があって、人材の育て方・活用策と社会の発展段階とは非常に関連深いというお話を伺ったことがあります。少し、別の視点からお話しいただきたいと思います。

■浜野克彦（はまの　かつひこ）
㈱ファンケル人事部人事研修グループ課長
地域振興整備公団等を経て、一九九七年十一月から現職。
※㈱ファンケル
八一年、ジャパンファインケミカルとして設立。無添加化粧品の通信販売からスタートし、現在は栄養補助食品事業も展開。本社は横浜市栄区。
子会社二社を合わせた社員総数：千六百人。九九年十二月に東証一部上場。

㈱ファンケル

❶―良い子の理解型、教師に煙たがられる納得型

丹羽　私どもは、いわゆるメジャーの予備校で、比較的生徒数が多いため、いろいろな種類の生徒を見ることができます。成績が大変良くスイスイ東大へ入ってしまう子もいれば、分数計算ができない子もいます。そういうところで生徒を見てきますと、生徒には、勉強のやり方や学習の姿勢によって、主に二種類あるのではないかと思えてきました。

一つのタイプは、我々は理解型と言っておりますが、言わば、予定調和型、肯定型であり、教室で教えられることは全て正しいという前提で吸収していくタイプです。ですから、今習っていることに問題点があったとしても、賢い人間がつくった教科なのだから、出てきた答は整合性があり正しいと考えて勉強を進めていきます。

もう一方のタイプは納得型と言っておりますが、これは、極端に言えば、森羅万象に照らして正しいかどうか、根源的に物を考えていくタイプです。ぶつかっている問題に納得のいく答が得られないとなかなか先に進めません。

どちらがよくできるか、成績が良いかと言いますと、勉強のできるほう、できないほう共に両方います。しかし、どちらかというと、勉強のできない、成績の低いほうに納得型が多いです。

それはなぜか、いろいろ調べたのですが、先生がどちらのタイプを気持ち良く教えられるかではないかというところに行き着きました。例えば、先生がテストの出題でミスした時に、出題意図を予想して答を考える理解型と、ずけずけ質問する納得型。あるいは、これは小学校で実際あった話ですけれども、「『遠い』の反対を書きなさい」という出題に対して、「近い」と答える理解型と「いおと」と書いて「なぜだめなのか」と言う納得型。先生にとっては理解型のほうが嬉しく、納得型のほうは、どうも煙たい。そういうことがあってはならないし、先生方も気をつけてはいるんですが、現実にどちらがやりやすいかと言えば理解型に決まっています。それで、納得型の子は教室で当てられることも徐々になくなって、勉強への興味を次第に失っていく、そういう状況が浮かび出てきました。

ですから、今、勉強のできる子というのはどちらかというと理解型に多く、答を発見する技術、これはものすごくよく心得ております。一方、納得型には、一旦、興味を覚えると、あるいは納得させてくれる人、ちゃんと説明してくれる人を得て学習意欲が沸いてくると、爆発的に伸びる子がいるのです。

❷―納得型をアメリカの大学に派遣

大学入試が最も厳しかった一九九一年頃、高校の先生とぶつかって勉強意欲を喪失したために今の成績は良くないが、実は有能で大変なパワーを持っている子を、生徒の個性や能力を引き出してくれる外国の大学へ入れてみるという試みをしたことがありました。最終的にアメリカの一つの大学（コミュニティカレッジ）を選びましたが、先方の条件は「成績不問。とにかくガッツ、やる気のある子」ということだけでした。我々は、①三カ月間でできるだけ体を使ったアルバイトをして三十万円稼ぐこと、②農作業・サバイバル生活（三人に一羽生きた鶏を与えて食料とするなど）に耐えられるか、のバリアを設けて、先生方の言う納得型という子どもを十五人選んで送りました。

結果は、半分はきちんとそこを卒業して帰国、残りの半分は四年制にトランスファーした後、就職したり研究活動をしたりしていますが、いずれも良い仕事をしております。大変パワーのある連中であるということが実証されました。

❸―これからの日本に必要なのは納得型か

つまり、納得型も理解型もどちらの能力も必要である。しかし、どちらかというと、理解型の能力は、国が近代化する過程、いろいろなものを理解して受け入れる段階で非常に重要であったため、これまでの日本では、いろいろな場面で理解型が歓迎されるような形になったのであろう。しかし、様々な分野で、世界的・国際的にトップに立った今後の日本では、納得型の能力が俄然注目されるのではないか、と考えられます。大学入学後を見ていきますと、独創的なことをやっていくのは、どちらかというと、成績のレベルにかかわらず納得型が多いのではないかと感じております。

❹―企業も納得型を望むが、見極めは困難

南　企業にとっては、どちらが有用なのですか。

浜野　一般論として、総論としては、企業が

■丹羽健夫（にわ　たけお）
河合塾　進学教育本部長
一九六八年から一貫して河合塾のカリキュラム作成、生徒指導に従事。現在、全国進学情報センター所長を兼任。
著書に「親と子の大学入試」、「眠られぬ受験生のために」など。

※河合塾
一九三三年設立。現在、名古屋を本校に、全国に二十三校を運営。大学検定コース、サポート校、通信制など多様な形態が特徴。これらを含む全生徒数：約六万人。

求めるのはやはり納得型です。あらゆることに対して知識ですぐ答が出せる理解型の人は、伝統的産業の大企業や官僚社会で力を出せる人であり必要な人材であろうとは思います。しかし、その人たちはこれからの企業活動の中では、新しい分野を開拓したり、新しいサービスを創出したりする仕事に貢献することはおそらくあまり多くはないだろうと思います。企業で、一つの事業を組み立てたり、新しい事業を起こす場合に必要になる、データ処理や計算ではない何か感性のようなもの、例えばユーザーが何を求めているかを感じる心のようなものは納得型の方が持っているだろうと思います。ただ、総論ではそう言っても、では、誰が納得型なのか、これがまだ見いだせないのです。例えば元気のいい人、能弁な人、行動力のある人が、果たして納得型かというと、ここが本当にわからないところです。そうすると、企業としては、どうしても無難な理解型の方に目が行ってしまうことはあります。一つ言えることは、事業を起こした人は、ほとんどが納得型ではないかということです。当社の社長も納得型の人だと思います。

6 横浜市の教育相談事例からうかがえる問題点

南　次に、横浜市における教育問題の現状はどうなっているか、その背景としてどのようなことが考えられるか、教育相談の実態からお話しいただきたいと思います。

❶―多い母親、教師からの相談

岡本　教育委員会では、増加傾向にあった教育関係の相談に一括して対応するため、平成九年度に教育総合相談センターを設置して、相談業務に当たってきました。まず、その相談が量的にどのくらいあったかをご説明します。実際の初期相談の窓口・仕組みには、「いじめ一一〇番」「一般教育相談」「子ども家庭支援センター」の三種があり、平成八年度から相談件数は年々増加し、十年度には合計で四万件を超えています（注1）。横浜市の児童生徒数は、高校と盲聾養護学校を含めて約二十七万人ですので、延べ人数ですが、一割を超える割合で教育に関する相談が寄せられていることになります。

次に、この数字の内容をみると、特徴的なことが二つ言えると思います。一つは、母親からの相談が多いことです。例えば、「いじめ一一〇番」では、母親からの相談は子どもや父親と比較して圧倒的に多く、母親の子育て不安が顕著に表れています（注2）。

もう一つは、教員からの相談が増加していることです。例えば「教育相談」での先生からの相談は、この三年間急増しています（注3）。内訳の八割は児童生徒の指導に関すること、一割弱が学校経営に関する校長先生からの悩みなどです。

❷―大人の気持ちが子どもに影響

一方、文部省がおこなった「子どもの成長についての満足度」に関する国際比較調査では、日本の親は〇歳から三歳までは七〇％程度と比較的高いのに、十歳から十二歳になると四〇％を割ってしまいます。

また、同じく文部省の「家庭教育手帳」の中で発表されている国際比較では、日本の子どもは自己肯定感が極端に低いという結果が出ています。「勉強ができる」「正直である」「勇気がある」「親切である」といった質問に対して、他国の子どもが四〇～五〇％程度の肯定率を示すのに、日本は一〇％程度しかありません。自己肯定感の低さは、自信の無さ、元気の無さに言い換えることもできると思います。

これらの現象は、全て「心」というキーワードで括れると思います。つまり、子どもに対する不満や不安という親の心と、自己肯定感、自信の無さという子どもの心は密接に関係していると思います。例えば、子どもが不登校になると、子どもとどうかかわったらいいのかということで、まず母親が非常に不安になり、その不安が子どもに伝わって、子どもも不安になってしまう。このような親の心の不安定の結果、元気のある子どもが育ってこないのではないか。そうだとしたらゆゆしき事態で、元気な子どもを育てるためにも、教師も含めた大人の安定感や自信の回復を急ぐ必要があると思います。

❸―親の悩みへ対応～自己開示の機会づくり

浅井　母親については、例えば子どもをエリートに育てたいと望むあまり教育が負担になってしまっているのか、母親が新しい生き方を求めて変わろうとしているのに社会が変化し切っていないという問題なのか、もう少しきちんと考えなければならないだろうと思

表　横浜市における各種相談件数の推移

	平成8年度	平成9年度	平成10年度	
いじめ110番	9,496	9,066	7,634	
(内訳)キッズライン	7,283	7,042	5,835	
メッセージ	1,345	1,014	840	
相談	868	1,010	959	
うち母親	556	538	526	(注2)
子ども	186	223	170	
子ども家庭支援センター	—	6,707 (10月から)	18,366	
一般教育相談	—	15,845	16,027	
計	9,496	31,618	42,027	(注1)
教職員相談	286	906	1,393	(注3)

いますが、国際比較調査をみても、「子育てが楽しい」と答える母親の比率が低いのは日本だけなんです。

南　今、社会の転換期にあって、自分の目標や生き方に自信を失っている方というのが、経済成長時代、あるいは社会がまだ一直線に進んでいる段階で育った、ちょうど今の親や教師の世代であって、その基盤が揺らいでいるために、子どもたちも不安を感じるということがあるのではないかと思います。また、浅井先生が子どもたちの変化の最後に指摘された、大人が自分が子どもの時と比べて何か都合の悪いこと、変化してしまったことを問題と感じているようなこともあると思います。

丹羽先生のところでは、生徒に多様なコースを用意されていますが、状況は同じでしょうか。先程の納得型の場合はどうなのでしょうか。

丹羽　同じだと思います。新しい時代に親がついていけない、あるいは親の文化と違うと不安になってしまい、それが子どもに伝染する影響はすごく大きいと思います。

例えば、高校受験に際して、あまり縛られたくないから午後から始まる高等学校はないかとか、朝は絶対に起きられないから二時間目から始まる学校はないかといった生徒の相談がたいへん多いです。最近では、文部省もかなり思いきって自由化していまして、通信制単位制高校が用意されており、これらは学校へ行くのが本当に少なくて卒業できますので、それを紹介するのですが、親のほうが抵抗を持ってしまいます。「土日以外に三日も四日も子どもが家にいると外聞が悪いからもう少し授業を受けられないか」とかですね。

納得型といいますか、自分で今現在やりたいことが見つかっている子どもの中には、宝塚へ行くが高校卒の資格は取りたいとか、相撲の稽古で毎日は動けないが高校卒の資格を取りたいとか、たいへん生き生きとやっている子たちもいます。しかし、そこでも、やはり親の文化とのズレ、親がついて来れないことによるトラブルは多いように思います。

南　先程の母親からの相談に対しては、教育委員会ではどのように対応なさっているのですか。

岡本　問題を抱えた時に孤立感が非常に強くなっていることに注意する必要があると思います。今年度から、「ハートフル・フレンド」と称して、不登校で家庭に引きこもっている子どもに対して、教育や心理学、医学専攻の大学生、大学院生に家庭訪問させる制度を始めました。そこでわかったのは、問題を抱えている時に親身になって相談に応じてはくれるけれど、決して自分の価値判断まではされない、自分が評価されるおそれはない、そういう場面や機会が、社会では非常に稀になってしまい、今、これが求められているということです。

南　悩んだときには特に、まず、自分のことを洗いざらい話すこと、それをまずは聞いてくれる人や場面が必要ということですね。

岡本　そうです。教育相談としては、臨床心理士と校長OB合わせて約六十人で対応しておりますが、やはり、基本は傾聴です。臨床心理士の方は、もちろんそれを心得ているのですが、元校長先生は教え授ける立場が長かったため、どうしても使命感で答えてしまいがちです。そこで、十分聴くことの訓練などの研修を積んだうえで、相談にあたっております。

浜野　自分のことを話す、わかってもらうということでは、最近の企業内教育で、今のお話に関連する興味深い例があります。企業内教育では、今、教えることよりも自分たちに気づいてもらう「気づきの教育」というところにシフトしてきています。「気づきの教育」とは、他人から外見でどう思われるか、経歴でどう推定されるかを本人にぶつけることによって、自分自身が気付かなかった面を発見させ、そこから自分の可能性を探らせるという手法です。お互いに自分を開示することで、コミュニケーションが円滑に行えるばかりでなく、自分に対する相手の評価がわかることで、自分に対しての気付きが生ずるとともに、相手から言われることを素直に受け入れるようになる効果があります。

❹―教師の悩みへの対応～専門家の導入

南　一方、先生への相談については、どのように対応しているのですか。

岡本　実際、いわゆる学級崩壊の事例で問題だと思うのは、経験豊富で自信を持っていた先生がその状況に追い込まれるケースが少なくないことです。先程のお話のように、従来の価値観で通そうというところにも原因があるのではないかと思います。

この場合、従来のような、問題を担任一人で、あるいは一学校で抱え込んで議論する方

■岡本勝利（おかもと　かつとし）
横浜市教育委員会事務局　教育センター所長
市立松本中学校校長、教育委員会指導第一課長、教育総合相談センター所長等を経て、本年四月から現職。
指導第一課長時代（平成七年～八年）に、新よこはま教育プラン（七年～十年）策定に携わる。

法では、責任放棄という意味ではなくて、もう、なかなか解決が難しい時代になってきていると思います。横浜市では、一区に一人雇用している臨床心理士や、これとは別に約九十人の臨床心理士などを「スクール・スーパーバイザー」として登録し、学校の要請に応じて支援に行ってもらう体制を整えております。実際、この方法は、問題自体の是正とともにその先生の改善にも有効であることが実証されつつあります。今後、役割分担制で、抱え込み、孤立化した教員とこの仕組みをどうつなぐかの調整や、この仕組みを学校組織の中にどう組み入れていくかの説得など、コーディネーター的な力量が学校長に求められる時代になってきていると認識しています。

7 将来のために是正し対応すべきこと

南　順番が前後しましたが、浅井先生が最初にご指摘された、現在の教育、あるいは今の子どもたちの成長の仕方の中で、やがて将来の社会に対して影響を及ぼしそうな現象は何かあるでしょうか。それに対してどう対処すべきかについてお話しいただければと思います。

❶―しつけ

丹羽　まず、いろいろなことの前提として、しつけということになりますか、それはきちんと行う必要があるのではないでしょうか。実は、予備校でも学級崩壊に似た現象は既に起きています。しかし、先生の方でそれが許されない理由や、こういう時にはこうするんだということを説明すると、そのとおりにやります。どこかでそれを説明していないのではないかという感じがしてなりません。

浅井　やはり、家庭のしつけができていない、それをやらなくなってきているということだと思います。どこかでやらなければならないことがあり、それはきちんとやっておいたほうがよい。では、しつけはどこでやるべきかというと、私は基本的には家庭なのだろうと思います。三歳ぐらいまでにある程度はしつけるべきでしょう。

❷―人間関係の希薄さ

岡本　将来の社会を考える際、今の子どもたちの人間関係の希薄さ、そこに起因すると思われる状況には的確な対応が必要だと思います。少子化や核家族化、地域のコミュニティの希薄化などと言われる中で、子どもたちの人間関係・交友関係が希薄になっています。昭和六十年代前半の調査では、外に出て五、六人で遊ぶというのが約三割と一番多かったのですが、平成七年で最も多いのは二、三人で遊ぶという回答です。今の子どもたちの多くが、核家族の中で親きょうだいのように価値観がほぼ同じ人間に囲まれて、自分を正しく理解し、受け入れてくれる環境で育ってきているため、ある意味での安定した人間関係を生みやすいと考えられます。しかし、同時に、自分のことをわかってもらったり、周りの人の気持ちを推察したりする必要が少ないため、人間関係を調整する力が十分育たず、自分の理解を越える価値観を受け入れる柔軟な構えも持てないまま育つことも考えられます。これは、これからの社会を共に生き、形成していく子どもたちを育てていくうえで、大きな課題になると思います。

教育委員会では、昨年度から『「まち」とともに歩む学校づくり』ということで、積極的に取り組んでいます。これは、学区を学びの場とし、学校教育が地域と一体となって子どもを育てるという発想に立つもので、子どもたちを「まち」に出し、自分の課題を地域で学ばせることを狙いにしています。この中では、例えば自分の親と違う職業の人々に接することもありますので、違う価値観に気付かせたり、コミュニケーションの方法を習得したりするには、有効な方法だと思っています。

8 社会に対する子どもの不満～変化に対応した仕組みが作れていない

南　今まで、教育を取り巻く現象や問題を親や教師の側からお話しいただいて、社会の変化への対応の困難を招いているのは、むしろそちらかなというようにも思います。では、子どもの側から見ると、今の社会にはどのような問題があるのでしょうか。

浅井　これだけ変化が激しい社会なので、子どもたちは、どうやって自己実現の道を探してよいのか、どうしたら自分を生かすことができるのかわからないのではないかと思います。将来に希望が持てない、夢が持てないというのはそこに原因があるのではないかと思います。しかも、アメリカの場合は、失敗してもやり直せる社会ですが、日本の場合は、

■南　学（みなみ　まなぶ）　企画局調査課長

まだやり直せない社会です。社会は変化していて、自分もそれにチャレンジしたいのだけれども、まだ古い価値観が残っており、社会が完全に変化しきっていない。そのギャップに対する不満が、いろいろな問題の一つの要因になっているように思います。先程のお話のマニュアル志向も、社会の仕組みが変わっていないことの一例のようなものです。例えば、リクルートスーツと言われる就職試験用のグレーと紺と黒の装いですが、あれを着ないとアパレル以外は通らないのだと学生は言います。彼らは、変わっていない社会の仕組みに合わせたマニュアルに従うことで、社会がそれで通してくれるならと合理的に割り切っているだけで、決してそうしたくてやっているわけではありません。

また、これからの社会では、暗記した知識でなく創造性や問題解決能力が必要とされるようになります。ナンバーワンを目指す社会から、これからはオンリーワンを目指してそれぞれが自分の個性を活かす社会になるといった変化の中で、今、社会が子どもたちに当てはめようとしているルールや枠は、もう通用しないということに、子どもたちは気がつき始めているのです。そして、自分の能力を活かすことで新しい社会にチャレンジしたいと考えているのではないかと思います。ところが、社会が変化しつつあるのに、子どもを教育する側がまだ新しい仕組みを作っていない、子どもたちを本当に活かすような教育が行われていない、社会システムの面でも新しい仕組みが作れていない。これも問題の要因の一つだと思います。

従来型の学校教育のシステムそのものが社会のそういう方向に合わなくなってきているのではないかと思います。どう創造性を育成するかとか、情報と情報をどう組み合わせて新しい情報を生み出すかとか、そういうことが問われているのに、依然として座らせて暗記させることをやっています。暗記的な知識ならコンピューターが全部覚えていてくれますから、あとは検索技術だけ身につければよいのです。

私の授業では、自分で問題を作ってそれに答えるという課題のレポートを課すのですが、学生はパニックを起こします。自分で問題意識を持つということができていないのです。問題意識を持ってそれを自分で解決したり、自分の生かし方をどう見つけるかなど、生きる知恵を持つということでしょうか、その辺が問われていて、もう知識を暗記する時代ではないのだろうと思うんです。ですから、先程申し上げた体験的な学習に若い人たちが関心を持つというのは、実体験を通して生きた知恵を身につけようという若い人たちのまさに知恵なのだろうと思います。

9 今後の教育のあり方

❶生きる力の習得、総合的学習に期待

丹羽 大学入試におけるアドミッション・オフィス入試（注4）は、先ほどの納得型とも言える生徒を探そうという大学サイドの動きととらえることができます。問題に対する答を見つけることは上手だが、そもそもの問題意識を持つことができない生徒が増えたという危機意識への対応です。しかし、私は、日本ではアメリカの本式のアドミッション・オフィス入試を行う大学はなかなか無いと思います。なぜかと言うと、ほとんど理解型でやってきて、もう一つ別の文化が理解しにくい日本の大学の先生方が、アドミッシッ・オフィス入試を本当にやれるのかという疑いを持っているからです。実際、現状では、青田刈りのような動機不純な方向へ一斉に流れていっています。

それと、先程の「無用の用」のお話との関連ですが、教科を一生懸命に勉強するだけではなかなか学力・成績は伸びないのです。我々は「知的バックグラウンド」と言っていますが、その背景的なもの、教科以外のもの、それらまで常に関心を持っている生徒が入試ではすごく強いです。例えば、以前、東京大学で「成績の良し悪しに関係なく全員一つの教室で教えるのと、クラス分けするのと、どちらが教育の公平か」という英文を読ませる問題が出ました。これには、単語や文法が全部わかっても、教育論のようなものを考えたことがない子は答が出ないんです。しかし、常にそういう問題に関心を持っている子は、単語が多少わからなくても解答できます。ですから、私どもは教科以外の講演会などを頻繁におこなっています。文部省の「生きる力、総合的学習の時間」も狙いはそこにあるのだろうと思います。ただし、私どもが講演会など総合的学習の時間に類するものをやってきて感じたのは、その運営には、特に、若い先生の大変なエネルギーが要るということとお金も必要だということです。ところが、今、

（注4）アドミッション・オフィス入試
アメリカでは、専門の入試事務スタッフが担当する学生募集の一形態。
日本では、書類選考と面接を中心に人物評価を主にした自己推薦入試の一形態。慶応義塾大学湘南藤沢キャンパスなどで導入されている。

小学校、中学校、高校の先生の平均年齢はどんどん高くなって四十五歳ぐらいです。総合的学習の時間というのがきちんと成立するのかどうか少々懐疑的にみています。

❷―教育の新しい仕組みづくり

浅井　まず第一に、幼児教育と初等教育のギャップが大き過ぎると思います。日本の幼児教育は、子ども主体の、ある意味ではとても良い教育をおこなっていると思いますが、小学校へ入った途端にいろいろと縛られるからうまくいかないのではないかと思います。幼児教育と初等教育の接続の改善については、今後文部省でも取り組んで下さると思いますので、それに期待したいと思います。

さらに、思いきって言わせていただくと、もう子どもを集め、教室に閉じ込めて一斉に教育する近代学校は終わったのではないでしょうか。新しい時代に向けて、教育の仕組み自体を変えていく必要があると思います。もちろん、学校がなくなるわけではないし、教育も、人間が存在する限り存在するでしょう。ただし、今までどおりの仕組みでおこなっている限り、子どもたちは反乱を起こすだけです。子どもたちは新しい時代を作っていきたいと思っているのですから、それに対応するようなシステムを考えていく必要があります。具体的には、当面は情報化を進めることと、岡本所長のお話にありましたように地域社会をうまく利用することではないでしょうか。一朝一夕にできることではないと思いますが、総合的な学習の時間、個性尊重の教育や、二〇〇二年からの新学習指導要領など少しずつ漸進的に改革が進められています。ただし、もう少し変革するサイクルを速めていく必要があるのではないかという気がいたします。

南　教育問題はやはり社会の状況と密接に関係していて、息の長い、そして変化に機敏な取組みが今後も必要だと痛感いたしました。そうは言っても、社会の発展に合わせた形で、子どもたちの能力が十分発揮できるような仕組みを整えることは急がねばならないと思います。文部省、横浜市はもちろん、地域の方々の協力もいただく形でいろいろな改善策が進んでいます。これらに期待するとともに、私たち自身、将来を担う子どもたちの成長に積極的にかかわっていく姿勢が必要だと思います。取組みの成果が意外と早く出てくるのではないかと、少々明るい展望を持ちつつ、座談会を終わらせていただきます。

本日は、多くの貴重な実例、お考えをいただきまして、どうもありがとうございました。